

第12回 理研バイオリソースセンター 実験動物検討委員会 議事要旨

日時 平成25年3月22日(金) 9:00~12:45
場所 富国生命ビル28階 理化学研究所 東京事務所 大会議室
出席者
(委員等) 米川 博通 委員長、伊藤豊志雄、木南 凌、城石 俊彦、山村 研一、
横山 峯介 各委員、
(NBRP) 佐藤事務局長、平田局員
(事務局) 小幡センター長、阿部副センター長、吉木室長、今泉研究推進部長、
村上課長他

■バイオリソースセンターの次期中期目標、計画について

- 理研バイオリソースセンター(理研BRC)は、研究色の強い時限のセンターと異なる基盤的事業であり、研究センターのような見直し、期間の設定を実施せずに柔軟に対応することが必要である。理研BRCの事業は、基盤的事業であるSPRing-8のような大型の共同利用施設と同様に、安定的に事業を継続することが非常に重要である。また、理研BRCは国のNBRP(National Bio-Resource Project)中核機関と同次元の活動を実施している。以上から、理研内首脳部に対して、NBRP等他の機関は国からの資金で運営されているが、理研BRCは理研内で予算措置されている点について理解して頂き、強靱なバックアップと理研BRCの事業に対する理解を要請する必要がある。
- 理研内組織改編については、理事長のリーダーシップ、グリップ力を強め、全体のガバナンスを強くするためだと思われるが、事業所とセンターの関係が必ずしも一体になっているように見えない。また、運営上の問題が発生した際の責任の所在が曖昧になる可能性がある。

■実験動物開発室の平成24年度成果について

- 日本では、研究コミュニティーにおけるデータ共有についての意識が一般的に薄いと思われる。International Mouse Phenotyping Consortium(IMPC)の枠組の中で、少なくとも一次解析のデータは、即時公開が原則と思われ、この部分を理解して貰うことが課題である。
- IMPCのマウスの2次解析を希望する一般ユーザーが、より詳細かつ高次の解析をする自由競争とすることを推奨する。
- IMPCのノックアウトマウスの候補遺伝子の申請について、特定分野の専門的な解析を目的として遺伝子の申請をしても、実際には想定外の表現型が一次解析で出てくることもある。従って、申請者に専門的な2次解析の実施を要求せず、柔軟に対応することを説明に加えることが戦略として必要である。
- IMPCの成果の見せ方についてだが、実験動物学会誌やMammalian Genomeなどにその分野のコーナーを設定して頂き、PubMedに掲載されるようにすると多くのユーザーが見ることができる。勿論、データベースは有用だが、いつもアクセスするとは限らない。効果的なパブリケーションの方法を同時に考えることを推奨する。
- 理研BRCの凍結胚の品質は日本でもトップレベルである。しかし、40%の個体復元率を例にとると、これを80%に上げたら使用動物を削減、費用も安くできる。これまでやっていたことを再検討して何らかの改善策を検討して頂きたい。このような取り組み

みは、人材が次々入れ代わり技術の伝承が難しい大学などの組織では難しい状況にある。

■実験動物開発室の平成25年度計画について

- 平成25年度予算についてだが、いろいろな計画がある中で、仮に10%削減されたとして、各計画を一律に10%削減して計画を遂行しようとするのか、あるいは、優先順位をつけて実行するのか検討する必要がある。

■提供手数料の改定について

- 実験動物の提供手数料を見直しの改訂案については、提案について、特に異議等なく承認された。

以上